

2019年の「世界経済フォーラム」の28カ国を対象にした調査では我が国の「SDGs」の認知度は49%で最下位であった。教育関係でも先進的に取り組んでいる学校が一部あるが、「知らない・聞いたことがない」という教員も結構いるのが実態だ。今や、時代を動かしていくべき考え方・行動計画なのだが。

「SDGs」(Sustainable Development Goals)、訳して「持続可能な開発目標」は2015年9月25日、国連総会において193カ国の首脳の合意の基に採択された。2030年を目標としている。目的は「世界を持続可能かつレジリエントな道筋に移行すること」であり、その精神は「誰一人取り残すことなく貧困・格差をなくし持続可能な社会をめざす」ことである。「持続可能な開発」とは「将来世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、現在のニーズを満たすよ

SDGs 危機の時代の羅針盤



南博・稲場雅紀 著
902円 岩波新書
☎03-5210-4000

著者は国連でのSDGsの誕生やその後の国内等の実践活動に直接かかわり苦労された。読者は本書のSDGsの取組や実践が社会や人々を変えていく姿に勇気をもらうことだろう。コロナ禍の危機においてもSDGsは間違いなく羅針盤となる。(教育調査研究所・寺崎千秋)

現在の人類社会は地球の資源再生能力の1・69倍を使うことで運営されている。しかも、その使用には大きな偏りがあり、貧困や格差等を生み出している。これらの問題を統合的に解決していくこととするのがSDGsであり、世界各地の状況や背景、様々な問題やその関連解決の取組などを本書が教えてくれる。

うな開発」。17の目標、169のターゲット等からなる行動計画などで示している。



策のためにも、目的を果たせていないと筆者は言う。それでも、説くのだが、その障壁として、教育関係者の社会調査に対する無知を指摘する。

本書は、問題のもっとも大きな要因として、「実態を把握する」という発想の欠如を指摘する。日本の教育政策は一部の関係者の「思いつき」で決定され、実行に移されることが少なくない。そして、わが国の子どもの学力の変化を把握できる自前の学力調査が存在しておらず、学力がこの20年で向上したのか、低下したのかといった基本的な情報すらわからないのだと言うのだ。

著者は、さまざまな教育問題が山積していると言われる教育

現場において、「即戦力」を求める気持ちはわからないではないが、それが全国学力テストを現行のまま維持するのみならず、改善しようという試みを潰す方向に働いていると言う。そして本書に書いたような話をする、全国学力テストの「競争」に振り回されているはずの学校の先生から、「政策のためのテストが必要だと言われても、学校現場は多忙なんだ。すぐに役立つテストをしていない暇はない」、「目の前の子どものために何ができるかが知りたいのであって、どうにもならない学力格差の話が聞きたいわけじゃない」と言われることも珍しくないと言う。

評者は考える。このような狭い視野では、評価活動が格差の解消などの改善につながらず、教員各自が自分の目先の活動に追い回され続けることになるだろう。まずは、視野を広げて課題を俯瞰したい。

(前聖徳大学教授・西村美東士)

全国学力テストはなぜ 失敗したのか 学力調査を科学する



川口俊明 著
2090円 岩波書店
☎03-5210-4000

現場において、「即戦力」を求める気持ちはわからないではないが、それが全国学力テストを現行のまま維持するのみならず、改善しようという試みを潰す方向に働いていると言う。そして本書に書いたような話をする、全国学力テストの「競争」に振り回されているはずの学校の先生から、「政策のためのテストが必要だと言われても、学校現場は多忙なんだ。すぐに役立つテストをしていない暇はない」、「目の前の子どものために何ができるかが知りたいのであって、どうにもならない学力格差の話が聞きたいわけじゃない」と言われることも珍しくないと言う。

評者は考える。このような狭い視野では、評価活動が格差の解消などの改善につながらず、教員各自が自分の目先の活動に追い回され続けることになるだろう。まずは、視野を広げて課題を俯瞰したい。

(前聖徳大学教授・西村美東士)